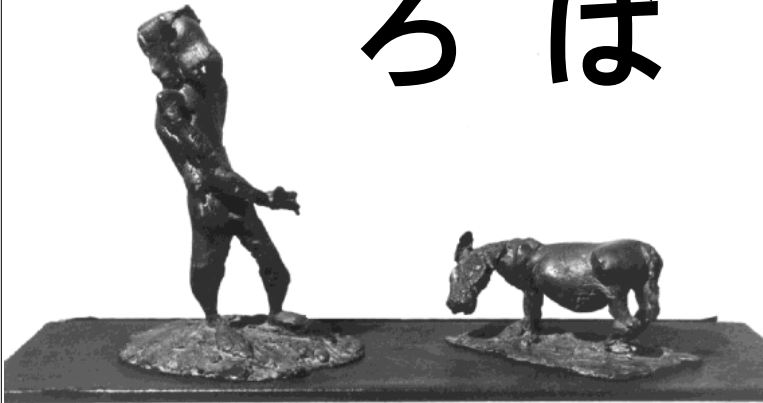


ろば



百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時30分
於 東京家政専門学校2階
聖書研究会：第1・3水曜 午後7時半
於 Zoom

連絡先：〒162-0066 東京都新宿区
市谷台町14-1-701 賈晶淳 方
TEL/FAX 03-6273-2930

<http://www.hyakunincho-church.com>

郵便振替口座：00180-8-565379



私の目線(八九)

旅

宮崎 亮子

今年も庭の萩が芽を出した。秋に咲く楚々とした小さな花とは別物のような逞しきで地面のあちこちから新芽を出している。会津八一の雅号は、秋草道人。雅号の由来は、萩・菊・葉鶏頭など秋の草花を好んだからだと知った。それなら私も萩を、無下には扱えない。明治生まれの八一は、仏教美術への造詣が深い人で、教育者、英文学者、歌人、画家、書家。マルチな業績を残した人で、その生誕地を訪ねるのが長年の夢だった。

ひそみきて たがうつかねぞ
さよふけて
ほとけもゆめに いらたまふころ

歌意

ひっそりとやってきて、誰が打つ鐘だろう、もう仏様も夢にお入りになる夜更けなのに。養女を亡くして失意のどん底にあった時の歌だという。

彼が敬愛した同郷の江戸時代の僧侶、漢詩人、歌人、書家の良寛にも勿論会いたい。それにコロナで一年延期した、息子の結婚式もある。久しぶりの移動だ。

カーナビをセットして宇都宮から高速に乗り、残雪の連山の大パノラマ等を眺め、まず新潟県出雲崎町へ。日本一美しい夕日が見ら

れるという丘からは、佐渡が見えた。日本海に臨む山上の良寛記念館。山と海に囲まれた雄大な光景。身にまとったいろいろな余分な心の垢みたいなものを風が綺麗さっぱり吹き飛ばしてくれた。観覧客は他には誰もいない。「明るくなつて性格が変わったね。」と友人たちから言われるが、以前は何度も神経症等の治療を受けていた私。「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む。」「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい」等は最も理解し難い、耳に痛い聖句だったが、父なる神様は長い時間をかけて導いて下さった。自分の努力ではなかった。本当に久しぶりの夫との旅。翌日が新潟市の八一記念館。翌々日が、結婚式だった。コロナ予防のため会食なし、親族のみ。式場は二人が出会った博物館。かつて河合塾で息子は、阿蘇さんの薫陶を受けることができ、親子で忘れえぬ先生であった。龍ヶ崎の農園で、河合塾や阿蘇さんのお仲間、いろいろな国の大勢の人たちと田植えをした。きたという春の日からもう十二年がたった。十七歳の息子は囲碁のプロ棋士の養成所をやめ、受験に舵を切り直した時だった。その後の転居後の空白を経て、私も再び百人町教会のメンバーにしていたくことができた。春は、みんなが何度目かの心の旅にでる季節だ。いつか良寛や八一の和歌を書きたいと思うが、生来の悪筆の上に、このような練習不足では、いまのところ、お恥ずかしいくらいである。

初なりの良いいちじく

エレミヤ書二四章一一〇節

賈 晶淳

本日の聖書はエレミヤ書から選びました。エレミヤの時代はバビロン捕囚への入り口にあたります。ユダヤ教におけるバビロン捕囚の意味は苦難と挫折を通して鍛えられ、生まれ変わり、新しい時代へ導かれる歴史の境目であります。

エレミヤ書はエルサレムとユダ王国がアッシリアやエジプト、そして新興勢力である新バビロニアに囲まれ、いつ攻められるのか日々不安の中で過ごしていた時期に与えられた預言です。当時、ユダ王国を始め周辺諸国は力関係の変化に敏感となり小国間の同盟や大国のどちらと手を組むかを悩む中エレミヤの預言もその重要性を増していきました。それは今日における日本が米中間の関係悪化の中で米国側に手を挙げているのと似ています。つまり、一国の力では自立できない不安な時代であったということです。

今日の本文である二四章の時代的背景はエルサレムがバビロニアに攻められた後の話です。殊に第一次バビロン捕囚と第二次バビロン捕囚との間です。バビロニアへの捕囚は二度、或いは三度に分かれて行われました。第一次バビロン捕囚は紀元前五九八年、第二次捕囚は紀元前五八七年前後に当たります。第一次と第二次の捕囚については列王記下の二章一二節以下に、第三次捕囚についてはエ

レミヤ書五二章にのみ出ています。

そして第一次捕囚の時にはエルサレムの城壁や神殿はそのまま残っていて、王政も残されていきました。しかし、第二次捕囚の時には神殿も王政も城郭も全て破壊されてしまいました。つまり、宗教や権力、生活の場までがすべて破壊されてしまうのです。

そのようなある日、エレミヤは幻の中でエルサレムの神殿の前に置かれた二つの籠を見ます。そして「エレミヤよ、何が見えるか」（三節）と問う声を聞きます。この言葉はエレミヤ書一章の召命記事の中の一一節と一三節に二度出ています。ここでは「アーモンド（シャークレード）の枝」や「煮えたぎる鍋」の幻をエレミヤは見ています。

三度目である本日の個所でエレミヤが二つの籠の中で見たのは、一方の籠からは良いいちじくを、もう一方の籠からは悪いいちじくでありました。二四章三節です。

主はわたしに言われた。「エレミヤよ、何が見えるか。」わたしは言った。「いちじくです。良い方のいちじくは非常に良いのですが、悪い方は非常に悪くて食べられません。」

そして、いちじくに対する説明が五節と八節以下に書かれています。先ず、良いいちじくについて五節から七節までです。

イスラエルの神、主はこう言われる。このところからカルデア人の国へ送ったユダの捕囚の民を、わたしはこの良いいちじくのように見なし、恵みを与えよう。彼らに目を留めて恵みを

与え、この地に連れ戻す。彼らを建てて、倒さず、植えて、抜くことはない。そしてわたしは、わたしが主であることを知る心を彼らに与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らは真心をもってわたしのもとへ帰って来る。

五節に出て来るカルデア人とはバビロニアの別称です。即ち、良いいちじくとはバビロニアに捕囚として連れて行かれた人々を指しています。神が彼らに恵みを与え、神自身を知らせ、彼らを神の民とし、将来必ずエルサレムに連れ戻すという約束のメッセージです。悪いいちじくについての説明は八節から一〇節までです。

主はまたこう言われる。ユダの王ゼデキヤとその高官たち、エルサレムの残りの者でこの国にとどまっている者、エジプトの国に住み着いた者を、非常に悪くて食べられないいちじくのようにする。わたしは彼らを、世界のあらゆる国々の恐怖と嫌悪の的とする。彼らはわたしが追いやるあらゆるところで、辱めと物笑いの種、嘲りと呪いの的となる。わたしは彼らに剣、飢饉、疫病を送って、わたしが彼らと父祖たちに与えた土地から滅ぼし尽くす。

悪いいちじくとは第一次捕囚の時にエルサレムに残された人々とエジプトへ逃れた人々を指しています。当時ユダ王国内にはバビロニアを支持する勢力とエジプトを支持する勢力がありました。エレミヤはバビロニアを支持する立場で、二五章九節でバビロニアのネ

ブカドレツアル王が神の僕であるようなことを言っています。エルサレムに残っていた人々は自分たちがバビロニアに連れて行かれなかったのを幸運と思い、エジプトに逃避した人たちも自分たちの意志で安全なところに避難できたと思ひ満足していましたが、二つのいちじくの幻を通して知らせたのは真逆の結果が示されていました。

結局、良いいちじくと悪いいちじくと分ける基準となりましたのは、どちらに神の意志が働いていたのかということでした。バビロン捕囚こそ神の計画であつたということです。そして、神が行おうとした計画の内容の一つはダビデ王朝の終焉であり、もう一つは捕囚後のダビデ王朝に代わる律法や神殿中心の新しい共同体への移行です。ダビデ王朝の終焉についてはエレミヤ書二二章二四節から二七節までに託宣として記されています。

「わたしは生きてゐる」と主は言われる。「ユダの王、ヨヤキムの子ユンヤは、もはやわたしの右手の指輪ではない。わたしはあなたを指から抜き取る。わたしはあなたを、あなたの命をねらっている者の手、あなたが恐れている者の手、バビロンの王ネブカドレツアルとカルデア人の手に渡す。わたしはあなたと、あなたを産んだ母を、生まれたところとは別の国へ追放する。あなたたちはそこで死ぬ。彼らが帰りたいと切に願っている国へ帰ることはできない。」

ダビデ王朝の終焉を通して新しい共同体へ移る過程には生みの苦しみが必要となります。

そして、その神の計画のためバビロニアという大国が、またネブカドレツアルという王が神の僕として選ばれたというのがバビロン捕囚に対する積極的な解釈です。そのためその苦難と試練は神の恵みであり、将来の約束にも繋がるのです。そのため捕らわれた人々が神中心のアイデンティティを再確認し、回復のためリセットを経験することになるのです。エルサレムからバビロニアは遠い場所であり、言語も文化も宗教も異なり、そこに移されてヤハウエ共同体としての自分の存在に再び気づくことができたのです。森の中では森が見えない、エルサレムの中ではエルサレムが見えない、王権の下では神の支配が見えないということですが、このことは一人旅で言語や文化などが異なるところで過ごすようになりますと自分の限界などが見え、それまで気づかなかつた部分を経験するのと一緒です。

しかし、その孤独と苦しみを積極的に受け入れない限りは新しい出会いもなく、開かれた未来に向けての一步も進めなくなり、バビロニアを避けてエジプトに行くということは選択の一つでありました。より苦しみが少ない安住の場所を選択するのは人の知恵だと思います。しかし、ここではどうしてその選択を悪いいちじくに例えたのかについて考えてみる必要があると思います。

今、私たちはCovid 19というコロナウイルスのパンデミックの状況の中で一年以上経過しています。同じ場所に留まりながらコ

ロナ以前とは全く異なる厳しい環境の中で過ごさなければならぬ経験をしています。これまで自由に動けた世界が見えないコロナウイルスの壁によって遮断され、形は違いますが一種の捕囚生活を送っていると考えられます。この死の不安を感じ、生活の基盤が揺さぶられる捕囚生活がいつまで続くのか、どう生きれば良いのか全く見当がつかない混乱の中です。エレミヤ書の今日の個所で示されているのは、先ずは現状をバビロン捕囚のように積極的に受け入れることであると思います。そして、この苦難の時を人類が共に乗り越えることを考えるようになった時に、人類の未来は新しい方向へと開かれるのだという教えではないでしょうか。勿論自らの安全と利益を守るのも選択の一つです。

本日の証詞の題を「初なるのいいいちじく」とつけてみました。二節の「初なるのいいいちじくのような、非常にいいいちじく」からの引用です。今回のパンデミックの苦しみを避けることができないなら、明日の世界へ向けての大切な意味として受け入れることを勧めたいです。パンデミックが終わった時点で世界は初なるのいいいちじくのように生まれ変わった世界となることを願います。現代世界の無計画な発展と急速な変化は人類と自然の共同体に大きな怪我をさせてきました。積極的な意味で今はその治癒の時、向きを変える時、回復を祈る時だと思えます。

(二〇二一年五月九日証詞より)

ZOOM礼拝、

そして初めてのZOOM総会

小島 悦子

もう一年以上高田馬場での礼拝ができず、賈先生がネットで証詞を録音配信して下さっている。大阪・東京などではコロナ感染第四波と言われるほど増加傾向だし、ワクチン接種も順調に進んではいないので当分教会で礼拝するのは無理だろう。このまま賈先生だけに証詞をお願いすると、先生の負担が大きくて健康が心配になる。そこで、月一度第三週は教会員がZOOMによって証詞を担当することに決まった。一回目は古野明美さんが引き受けて下さった。今までPC、タブレット、スマホなどを用いて百人町教会の多くの方々がZOOMで集会などに参加しているのでZOOM礼拝も自然に始めることができた。昨年発行の『教会「百人町」の風景Ⅱ』のアンケートにあった「通えなくなったらネットなどで参加したい」ということが期せずして始まってしまったことになる。ただネット環境がない方のことはとても気がかりだ。

これまで行ったZOOM礼拝については、目が疲れる、録音の証詞の方が集中して聴ける、家族に気兼ねする、などの感想があった半面、仲間と顔を合わせる喜びやユーチュー

ブ配信のように一方通行ではなく質問があればその場ですぐ聞け、その後応答をすることもできるという意見もある。そして何といっても遠方の方も参加できる良さがある。まずは高齢化し教会に出席できなくなったとしても参加は可能だ。礼拝中は司会者と証詞者以外はミュートにして音を消している。讚美歌も参加者はミュートにして音を消し録音に合わせ自宅で歌うようにしている。これらも皆さんのご意見などを取り入れて工夫を重ねていきたい。そして今後ワクチン接種が進めば、地域ごとの家庭集会のような場を設け、賈先生に出前礼拝をもらうこともできるかもしれない。

四月一日ネット礼拝の後、初めてZOOMで総会を行った。昨年は五〇周年記念集会の時、賈先生が一人で報告して下さった。五分前にZOOMに入るとすでに三、四人の方々がいてこんにちとは声がかかる。次々に人が増え、その都度こんにちは、久しぶりなどと再会を喜び合った。出席者は二二名で一昨年より多い。議長の前中榮子さんがスムーズに議事を進めていく。画面に映る資料の文字が小さくて読みづらくもつと大きくとお願いしようと思っていたら、先生が少し拡大してくれ楽になった。会の途中でも「雑音が気にな

るのでミュートにして」とか「退出します」などと進行を妨げることなくチャットで画面に出るのが便利だ。会計からの決算承認も挙手で問題なくできた。そして、いよいよ世話人改選の投票をすることになった。私はいまできるかこれが一番心配だった。何しろ世話人会では三回も練習したのだから。先生が「まずチャットをクリックして。そこに参加者全員の名前が出るから、選挙委員の小川さんをクリックして」と説明してくれる。が、初めての人からはクリックしても出てこない、メッセージが出ないなどという声。しかし、慣れている人も多く一〇分ほどでつつがなく選挙は終わり皆さんの理解力に感心した。個人情報保護の観点からZOOMに出る名前を消した方がよいという意見もあったが、全く関係ない人はホストの先生が招待しないので問題ないということだった。今年度関係者名簿はPDF版で届けられた。先生にお願いすれば必要な方には議事録と関係者名簿は郵送してもらえ。初めてのZOOM総会は無事に行ってきたが、来年はぜひ高田馬場の教会で行えるようになりたいものだ。ここまでの準備をして下さった賈先生、議長の前中榮子さん、書記の小川ひとみさん、会計の新谷照子さんに改めて感謝したい。

ローマ字讃美歌と阿蘇道子さん

小池 恵子

百人町教会には讃美歌21をローマ字化したものがあります。これは阿蘇道子さんの労作です。道子さんは日曜日の礼拝ごとにその日に歌う讃美歌三編をローマ字化した上、五部ほど印刷し持参して黙って礼拝場受付に置いていました。日本語のわからない外国の方々とも一緒に讃美歌を歌い礼拝をともにしたいとの思いからでしょう。フィリピンの方、韓国の方、クルドの方ほか外国の方々も礼拝に参加することも多かったです。さらに当日、道子さんはこのローマ字讃美歌を見ながら歌い印字に間違いが無いか確認していました。過去の記録をたどってみると道子さんのこの作業は二〇〇四年頃から始められたようです。阿蘇道子さんは讃美歌を一番から順繰りにローマ字化していったのではなく、その日曜日に必要な三編だけをローマ字化していきました。これも道子さんらしいです。単純に計算すれば五八〇編ある讃美歌を一週三編ずつローマ字化していけば四年もたらずに作業は終わります。でも礼拝では同じ讃美歌を繰り返し返し歌うことが多いです。道子さんは焦りません。自然の流れに任せたまま、その作業は道子さんが最後に出席した二〇二〇年二月三日の礼拝まで一六年間続きました。作業が終わらずに残された讃美歌は一〇余編のみでした。これは百人町教会で歌ったことがない讃美歌というわけですが、教人のものが分担

しローマ字化作業を完成させました。ローマ字化推進のためか、賈先生は過去に歌ったことがない讃美歌を意識して選ばれていたように思います。初めての讃美歌ということもあり、歌いにくいな一と思ったことが何度もありました。

阿蘇道子さんは不思議な人です。誰に相談することもなくそのとき必要だと思われることを黙って実行していきます。百人町教会の「ろば」の目録を一号からパソコンに打ち込

456 わが魂を愛するイエスよ

1. Waga tamashii o aisuru Iesu yo,
Nami wa sakamaki kaze fuki arete,
Shizumu bakari no wagami o mamori,
Ame no minato ni michibiki tamae.
2. Ware ni wa hoka no kakurega arazu,
Yukinayamumi o mikokoronni tome
Tayoru mono naki waga tamashii o
Tsubasa no kage ni yadorase tamae.
3. Shu no na ni tayori subete o yudanen
Tsumi no konomi o awaremi tamae
Yowaki o sasae kokoro o iyashi,
Megumi to makoto michisase tamae
4. Shu koso tsukisenu inochi no izumi,
Taezu wakiide kokoro ni afure,
Ware o uruoshi, kawaki o todome,
Tokoshie made mo yasuki o tamae.

み始めたのも道子さんです。途中から後任の者が引き継いでいますが、これが存在することを教会のほとんどの人は知りませんでした。これがあつたおかげで昨年創立五〇周年記念誌『教会「百人町」の風景Ⅱ』を作成するのにどれほど役に立ったかを痛感した一人として、作業を始めた道子さんに改めて感謝しています。必要なことを思いつく能力はどこから来るのでしょうか。

道子さんは誰も思いつかないようなことをして人を楽しませる達人でもありました。例えば、イースターの時にあの小きなウズラの

卵一つ一つに聖句を印字した紙を巻き込んで箆一杯持ってきたり、大きな大きな魚一匹を丸焼きにして持ってきたこともあります。お父様が好きだったという老舗のあんパンを大量に持ち込んだこともあります。道子さんが最後に出席したクリスマス祝会に持ってきたのは障子紙（これも道子さんらしい）に包まれた赤ん坊の頭くらいある柑橘でした。

決して無理はしないけれどそばにいる人が何を必要としているかがわかり、さりげなく手を差し伸べる人でした。道子さんが亡くなったのは二〇二〇年四月ですが、その翌月五月三日憲法記念日に、毎年新聞に掲載される「武力行使に反対し、憲法九条を守る」市民意見広告に「あそみちこ」の名前がありました。

阿蘇道子さんが逝って一年二ヶ月、道子さんが遺してくださった宝物を大切に活かしていきたいです。

コロナ禍の中

最後のリサイトを終えて

前中 榮子

二〇二〇年一月二一日王子ホールに於いて第二五回リサイトを終了しました。コロナに翻弄されましたが無事終える事が出来、私の中ではひそかにこれが最後と決めており殊の外感無量、皆様の心に届く演奏が出来ていましたら最高の喜びです。長年研究している発声と詩が一体となる演奏めざして研鑽、

馴染みの薄い日本歌曲にお付き合い下さり感謝です。会場は一年半前に予約、その時はコロナの事等誰も予想はしていなかった。二〇二〇年二月八日のトリオコンサート前中(Sop)佐々木真(Flu)新垣隆(Pf)が終わった頃、中国武漢からコロナの噂?新垣さん人気でチケットは完売し喜びの中で終了。阿蘇道子さんも来場下さり、これがお目にかかれた最後となりました。四月から緊急事態宣言となり自粛中はひたすら歌に専念、委嘱をお願いしていた曲が一曲出来上がる度に作曲家から送られて来て次が届くまで譜読みの日々、おかげでコロナ禍鬱は免れた。緊急事態解除後、仕事は激減!歌は人間の本能的な喜びで、とても大切な要素を持つているのに音楽界で歌が一番最初に禁止になり解除は最後と言われコロナの恐ろしさに震撼!リサイタル資金を生み出す術も閉ざされ不安がよぎった。その時二期会から持続化給付金申請の情報があり認められ赤字補填の目途が立ちひと安心。観客定員半分等々コロナ禍対策の制約はあったが前へ進める目途がたった。

二〇代後半に関東に転居、全てが不思議な導きとしか考えられない出会いがあり百人町教会へ。阿蘇牧師が歌を再開する背中を押して下さり一九八二年第一回リサイタル開始、「愛と平和への祈り」をサブテーマに!その源は小二の夏休み、広島の祖父宅で過ごした経験が根底にある。一九四五年生まれの私が戦後七年の広島で沢山のケロイドの人々に遇った事が起因している。その後教会の旅行でカンボジアへポルポト時代の虐殺跡や個人的にはアウシュビッツへの旅等の体験が平和への希求の心をより深めてゆきました。今回リサイタルで取り上げた東京藝術大学音楽学部大学史料室保存の戦没音楽学生の遺作の演奏会が大学内で開かれている事を知り、室長に私の演奏会の意図を伝え貴重な楽譜を貸して頂くことになった。又何度か訪問した無言館の館長にも、戦没画学生と同じ時代に生きた事が起因している。その後教会の旅行でカンボジアへポルポト時代の虐殺跡や個人的にはアウシュビッツへの旅等の体験が平和への希求の心をより深めてゆきました。今回リサイタルで取り上げた東京藝術大学音楽学部大学史料室保存の戦没音楽学生の遺作の演奏会が大学内で開かれている事を知り、室長に私の演奏会の意図を伝え貴重な楽譜を貸して頂くことになった。又何度か訪問した無言館の館長にも、戦没画学生と同じ時代に生きた



岡川信好デザイン&制作

命を落としていった戦没音楽学生のコンサートのチラシを置かせてもらうようにお願いしたり、演奏会当日はご遺族の方々もご来場下さり、その中の一曲「雨」の遺族の方は曲のテンポに共感・納得されたようです。歌は母音の音色を揃える、子音の立て方の工夫でより日本語を明瞭にさせる等々いろんな角度から曲を仕上げて行きますが(私の結論は自然な発声は内面表現に迫れると)この曲は相当ゆっくりなテンポを想定、ヴェスをキープするのは大変でしたが、亡き人と思う残された人の思いをこのテンポの中で音色が乏しくならない工夫が功を奏しました。当日のリハーサルではミスが多く心臓が破裂するのではと緊張の中で本番に突入、だが不思議と何かに守られていたかのよう集中出来ました。室長の弁「会場に戦没音楽学生が聴いている気がして涙があふれた」と。皆様から身に余る拍手と感想を頂き、その後も彼等の作品を外部の私が演奏した事が藝大大学内で話題になったそうで、これからはチャンスがあれば広めていって下さいとの言葉があった。平和への祈りの集大成として取り上げた彼等の作品が伝わった事は喜びでした。これまで私の演奏意図を的確に書いて下さっていた評論家も来場、「とてもよく考えられたプログラムで素晴らしい」との葉書を頂戴しましたが、掲載される雑誌のその号の音楽家枠はコロナ禍で縮小され残念ながら私は載りませんでした。百人町教会の五〇周年も経て共に教会の一員に加えて頂き多くの事を学び私の信仰は歌の表現の中で示したいと思いつけて来ました。二五回リサイタルライブCD(発売中)も作成これまで一二枚制作、でも在庫が押し入れに一杯。リサイタルも採算が合わないのを覚悟で始めた事、今はやり切れた感で心は充実しています。これからは小さなコンサートをしながら引き際を見極めて行こうと思っています。コロナ禍を乗り越えて今年予定のコンサートも無事開催出来ます様!演奏会が何の心配なく開けます日が早く来ることを祈る日々。そして最終章の始まり。歌以外の楽しみも探し求めて。

選択的夫婦別姓の議論から見えること

高島 紗綾

現状、日本人同士が日本で別姓では法律婚ができません。従って、別姓を選ぶと事実婚状態となります。すると、同姓で法律婚したカップルと比べ様々な場面で不利益を受けません。故に、私は、婚姻に際して、「別姓」にするか「同姓」にするかを結婚する本人達が選べる制度を望んでいます。

職業選択の自由があるように、信仰の自由が保障されているのと同じようにです。これに関する話題は、連日報道されています。

四月二一日には、アメリカニューヨーク州の法律に基づき婚姻した日本人カップルの婚姻が日本国内でも有効か確認する訴訟の判決があり、原告カップルの婚姻は有効との判断が出されたことは記憶に新しいと思います。私も別姓事実婚当事者としていくつかの取材を受けました。

その中で感じたのは、この問題は何が問題なのか、取材する側が理解できていないこと。よく、なぜ別姓を選んだのかと聞かれます。私の返答は、簡単に言うと、不快な思いをしたくない、幸せを感じるという基準で素直に選んだら美味しいものを食べたいと思うのと同じ感覚であり、能動的な理由を挙げるなら、対等な関係性を体現したいからとなります。「同姓強制」により、その不利益を実際に受けるのは多くが女性です。従って、これは女

性の不利益の問題だと思う人もいるでしょう。

二〇一一年から始まり二〇一五年に最高裁の大法廷にて判決が出された「第一次選択的夫婦別姓訴訟」と現在最高裁の大法廷に回付されている「第二次選択的夫婦別姓訴訟」の大きな違いは、前者は、原告の多くが女性で「女性の差別」を訴えたのに対し、後者は、事実婚カップル(男女とも)が原告となり、同姓を選択したカップルとの差別について争っている点だと思えます。別姓の選択肢がないことは女性の不利益の問題ではなく、男性も含めた社会全体の問題でもあるのです。

取材では、夫婦や家族に関するプライバシートナ話をします。ですから記者にもメディアとしての立ち位置はあるにせよ、一個人として対等に話したいので、自身のこれらに関する考え方を聞きたいと伝え、その都度双方向のコミュニケーションを取るようになっていきます。こういった話をすることで、女性の不利益の問題だと思っていたことに気付いたという男性記者が複数いました。このこと自体が問題の根深さを物語っていると思うのです。

対等な関係性を築きたい、選択の権利が必ずやだと話しているときに「奥さん」「ご主人」と呼びかけられることもしばしばです。正に、無意識であることが、厄介です。

最近、もう一つ注目すべき判決がだされました。同性カップルらの「結婚の自由をすべての人に」という訴えに対し、札幌地裁が、同性カップルに結婚の法的効果が及ばないこ

とを違憲としました。

私は自分のセクシャリティーを問う必要性をそれほど感じてこなかったと言えます。それは、あえて括るとすればシスジェンダーでヘテロセクシャルというマジョリティーに属するからです。

別姓の選択肢がないことの問題を語る時、社会の中のマイノリティーとして共通する部分があるので、多少の意識はしてもセクシャルマジョリティーであることによって、それを言語化しなくても済んだからだと考えています。このようなことは、よくある構造だと思えます。でも具体的なことはよく気を付けないと見えないなと思っています。

私自身のことでは、例えば、養育里親は社会の中では少数だけれど、実子がいる里親はその中でも少数になる。事実婚の里親はさらに少数になる。しかし、ただ夫婦間に実子がいる部分だけ取り出すと、少数ではなくなるという具合です。

子どもの保護者会等で発言する際に、別姓なので子どもと氏が違うと言うべきなのか、言わない方がいいのか、その時々で選択を迫られている気がします。そのこと自体がストレスとなり、小さな暴力にさらされていると感じます。

一方、自分が多数派に在ること、気にしなくていいという特権を享受し、無意識に誰かを踏みつけていることもあるのだと思う今日この頃です。

図書紹介

『私が原発を止めた理由』

樋口 秀明著（旬報社）

二〇一四年、福井地裁において大飯原発運転差止判決を下した著者は、この本の目的を「現在の原発はそれなりに安全だと思ってる人にも、原発の問題はイデオロギーだと思ってる人にも、保守の人にも革新の人にも、脱炭素社会の実現が重要課題だと思ってる人にもそうでない人にも等しく、原発の本当の危険性を知ってもらうこと」であると書いています。そして原発の運転が許されない理由は極めてシンプルな①事故のもたらす被害は極めて甚大。②故に高度の安全性が求められる。③地震大国日本での高度の安全性とは高度の耐震性が有るという事。④我が国の原発の耐震性は極めて低い。⑤依って原発の運転は許されない。の五つであり、これは福島原発事故の教訓を踏まえれば誰にでも理解でき、納得せざるをえないはずなのだと切り切ります。それなのに、法律家を含む多くの人々が「原発の危険性を判断するには高度な専門知識が必要だ」と思い込んでいるところに、そもそも原発停止に対して当たり前の率直な判決が出されない原因がある、というのが終始一貫した著者の主張です。

福島事故前、著者は原発の安全性について疑問を抱くことは無かったと言います。浜岡原発の見学で「原発は地震に耐えられるのか？」という司法修習生の質問を「大地震に備えているのは当然なのに」とちよっと馬鹿にしていたし、チェルノブイリ事故の時も日本の原発は「止める、冷やす、閉じ込める」が徹底しているから大丈夫という専門家を信じ込んでいたと記しています。けれど、大飯原発差し止め訴訟を担当することになり「地震予知は可能。大飯の敷地に限っては基準値振動七百ガルを超える地震は来ない」という関西電力の主張を聞き「これは理性と良識の問題」と気づきます。何故なら七百ガルを越す地震は極めて普通のもので知ったからでした。そして、法曹界にありがちな誤った先例主義（この場合、裁判所は原発の安全性を直接判断せず規制基準の合理性を判断すればよい）によらず、被災者の身になってリアリティーをもって判断しなければならぬことに行きつきます。原発専門家ではない著者が、自信をもってこの判決を出せるに至ったのだと思います。その後、名古屋高裁金沢支部でこの差止判決は破られました。退官後の著者はあえて弁護士を選ばず、全国各地を巡り原発の危険性を訴え続け、宗教者核燃裁判にも親身に関わってくださっています。様々な格差やコロナの問題等多くのことも原発過酷事故の下では根底からひっくり返されます。三・一一後の私たちには、この原発の問題を正しく理解し論理に従って行動し健全な怒りを示す責任があると著者は訴えています。

併せて「原発に挑んだ裁判官」（朝日文庫）もご一読をお勧めします。（泉谷 五十鈴）

巻頭の宮崎亮子さんはコロナ禍によりネット礼拝になったので百人町教会に戻って来られた。ろば編集委員会も今はZOOMなので委員を引き受けて下さることになり、これはコロナのお陰と言えるかもしれない。

阿蘇道子さんは黙って行動する人だった。ローマ字讚美歌もこれまでの「ろば」の目録作りもこんなに長く続けて下さったことを初めて知った人も多いと思う。そしてその後を引き継いでくれた人にも感謝したい。

昨年二五回目のリサイタルを開いた前中榮子さん。難解な歌詞を覚え聴衆の心に届けるためにどれだけ大変な努力をされてきたのか。前中さんのホームページを開くとこれまでのリサイタルの画像が見られ、歌も聴ける。

高島紗綾さんの文章からは、選択的夫婦別姓を求めるが故の事実婚によって受ける不利益だけでなく、学校の保護者会で名乗る時の逡巡など、マイノリティ側には様々なストレスがあることに気づかされる。多数側のもつ無意識の差別も忘れられないようにしたい。

図書紹介からは思い込みを捨て法曹界にある先例主義によらず判決を下す裁判官がいることに勇気づけられる。原発の問題を正しく理解するためにも是非読んでみたいと思う。高齢化に伴い細かい文字が読みづらいという声を聞く。ろば委員会でも検討し今回試みに四頁の文章だけ行間を広げてある。皆さんの感想を参考に次号を決める予定。（小島悦子）

ろばのせなか